

琉球大学学術リポジトリ

Happy Victimizer

課題にみる児童期の他者理解の発達 — 沖縄と東京の比較 —

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2011-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 嘉数, 朝子, 根間, 大輔, 上地, 亜矢子, 廣瀬, 等, 青野, 真澄, 柿沼, 美紀, 上村, 佳世子, 小林, 福太郎, Crystal, David, 廣瀬, 真喜子, Kakazu, Tomoko, Nema, Daisuke, Uechi, Ayako, Hirose, Hitoshi, Aono, Mashumi, Kakinuma, Miki, Uemura, Kayoko, Kobayashi, Fukutaro, Crystal, David, Hirose, Makiko メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/19049 |

Happy Victimizer 課題にみる児童期の他者理解の発達 — 沖縄と東京の比較 —

嘉数 朝子¹ 根間 大輔² 上地 亜矢子³ 廣瀬 等¹ 青野 真澄⁴
柿沼 美紀⁵ 上村 佳世子⁶ 小林 福太郎⁷
Crystal, David⁸ 廣瀬 真喜子⁹

The development of children's understanding of others by 'Happy
Victimizer'-Comparison of Okinawa and Tokyo-

Kakazu Tomoko Nema Daisuke Uechi Ayako Hirose Hitoshi
Aono Mashumi Kakinuma Miki Uemura Kayoko
Kobayashi Fukutaro Crystal, David Hirose Makiko

要約

本研究では、①Happy Victimizer 課題を用いて小学生の1年生から4年生の他者理解の発達的变化を検討すること、地域差、課題差を検討することを目的とした。発達的变化は先行研究と一致して、自分が加害者の場合は1年生よりも3、4年生が共感的であった。地域差については2、3学年で沖縄が東京よりも共感的という結果であった。課題差については沖縄ではアメ課題でHV傾向が大であった。東京では課題差は明瞭ではなかった。

背景と目的

近年子どもの社会的認知研究の中で注目されている課題がHappy Victimizer(HV)課題である。HV課題とは、葛藤場面での加害者や被害者の気持ちの推論から、児童の他者理解の発達を検討するものである(Arsenio.&Kramer, 1992)。

子どもの道徳の領域の従来の理論では、抑制を求められる場面で、例えば順番を守らず友人よりも先にブランコに乗るなど、被害者の痛みへの共感、罰へのおそれなど、加害者の感じる感情のすべてが、加害者を負の情動(寂しさ、不安、罪悪感)を導くと考えられてきた。ところが、近年HV課題の知見から、児童期でも加害者は「嬉しい」という判断をすることが報告されている。被害者の気持ちの理解はできていることから、被害者への共感性は十分に育っていることは確認された。ところが、HV課題では、生の感情(何らかの利益を得ることができるので嬉しい)を持つ子どもは判断していることになる。

1 琉球大学 2 神原小学校 3 たかえすクリニック 4 和光小学校 5 日本獣医生命科学大学
6 文京学院大学 7 目白大学 8 Georgetown University 9 沖縄女子短期大学

これらのHVの研究概念は、道徳判断や向社会的行動の発達理論と対抗するものであるように見える。しかし、Arsenio & Kramer (1992) は、加齢とともに帰属の仕方に移行が起きるのではないかと述べている。つまり、年少児は結果期待であるが、年長の子どもはより道徳的志向へ移行するということである。HVの研究者は道徳判断理論に反旗を翻すことを目的とはしていない。他者の動機に気づいているが、自分の利益も嬉しいということが併存していると考えられる。彼らは4歳、6歳、8歳の子どもを対象にHV課題を調査した結果、年齢があがるにつれて、加害者が「うれしい」と答える比率は下がっていった。被害者についてはいずれの年齢においてもほとんどが「悲しい」と答えていたが、加害者の気持ちについては、8歳ごろに理解が可能になると報告されている。

柿沼ら(2001)は母子の語りの研究から、語りの内容には地域差が見られることが明らかにしている。さらに、心の理論課題の発達過程など、子どもが他者理解を深めていく過程にも地域差が見られるかを検討している。彼らはHV課題を心の理論の次の発達段階を計るものとして捉え、日本でHV課題を実施した(柿沼ら:2008,2009)。その際に、視点取り(加害者の立場にたって判断する)と、自分に置き換えて判断する2つの質問を行った。柿沼ら(2009)は、地域比較の第一段階として東京の小学生を対象にHV課題を実施した。結果は、加害者が「悲しい」という回答に学年差はなく、自分が加害者の場合は、4年生が1年生に比べ「悲しい」と答える割合が高かった。また、2年、3年、4年では加害者より、自分が加害者であった場合の方が「悲しい」と答える割合が高かった。

つまり、自分が加害者であった場合のほうが、他者が加害者のときよりも共感的であった。すなわち、子どもは「加害者」の気持ちを自分の立場に置き換えて判断する傾向があるといえる。彼らはこの結果から、2年生になると theory-theory よりも simulation theory の方略を用いて課題を解決していると推測している。

また、彼らは先行研究と比較して、日本の子どもは加害者が悲しいと答える時期が遅いこと報告している。自分が加害者なら「悲しい」と答えたのは、4年生で半分以下であった。この結果から、柿沼らは次のように結論付けている。「子どもは被害者への共感性はあっても、自分の利得で嬉しいと思う傾向があることが分かった。この結果から相手の立場に共感させるというだけでは不足であることが示唆される。感情の理解を理論的に説明するだけでなく、(すでに分かっているので)、繰り返し、そのつと相手の気持ちを示し、規則やお約束、という複数の手段で指示していく必要性が示唆された。」

本研究では子どもが他者理解を深めていく過程にも地域差が見られるかを明らかにした

い。すなわち、本研究ではHV傾向の国内差について、東京と沖縄の小学生を対象として検討することを第一の目的とする。両者は、首都圏と地方都市という違いのほかに、地理的、歴史的条件が異なる。沖縄県は伝統的地域社会が残っており、東京は核家族化の進行が早いうえにきょうだい数も少ない。その点では沖縄の子どものほうが共感的であると予想されるため、HV傾向は少ないと思われる。

第二の目的として、HV課題の課題差をとりあげる。ブランコ課題（ブランコに乗っている友人を押しつけて自分が乗る）は暴力的な場面であった。本研究では、道徳判断課題などから新にアメ課題（友人の鞆の中の飴をこっそりとって食べる）を考案した。これは、物質的な報酬を得る場面である。道徳性の発達に関する先行研究の中で、子どもは身体的危害を盗みよりも違反としてより厳しく判断していることが報告されている（Davidson, Turiel.& Black,1983）。そこで、本研究においても、攻撃性のある損害のほうが損害が大であると子どもは推測すると予想されるので、ブランコ課題よりアメ課題の方が「うれしい」と答える比率は増えるだろう。

方法

調査対象者：沖縄県T小学校と東京都S小学校の1年生から4年生を対象とした。詳細は表1に示した。

| | | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 4年生 | 合計 |
|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 沖縄 | 男子 | 15 | 18 | 21 | 34 | 88 |
| | 女子 | 27 | 29 | 30 | 24 | 110 |
| 東京 | 男子 | 49 | 51 | 43 | 36 | 179 |
| | 女子 | 54 | 56 | 55 | 49 | 214 |

調査尺度：①Happy Victimizer 課題：Arsenio,&Kramer（1992）のHappy Victimizer 課題からブランコ課題、キャンディー課題。葛藤場面で加害者や被害者の気持ちを「少し悲しい」～「かなり嬉しい」の6段階から選択する（付録参照）。

調査方法：クラス単位で集団実施した。

調査時期：2008年12月

結果と考察

I HV 課題の地域差

1 課題ごとの有効回答数

両地域の有効回答数を表2示した。これに示されるように東京の1、3年生で有効回答率が低かった。1年生では設問の理解度に困難があったようだ。3年生の低回答率の原因は

不明である。両課題において、両地域ともに被害者の気持ちは全学年で全被験者が悲しいと答えていた。課題差が予想されるので、課題ごとに以下の分析を行った。

表2-1課題ごとの有効回答数(%)

| | 沖縄 | ブランコ | アメ |
|-----|----------|----------|----|
| 1年生 | 40(95%) | 39(93%) | |
| 2年生 | 47(100%) | 46(98%) | |
| 3年生 | 48(94%) | 49(96%) | |
| 4年生 | 56(97%) | 56(97%) | |
| 全体 | 191(96%) | 190(96%) | |

表2-2課題ごとの有効回答数(%)

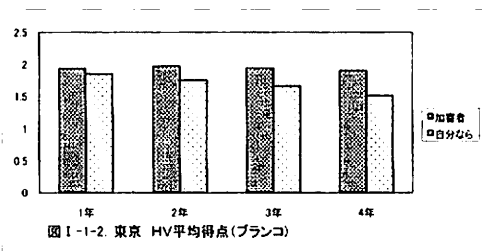
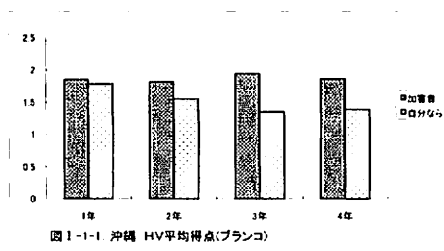
| | 東京 | ブランコ | アメ |
|-----|----------|----------|----|
| 1年生 | 74(72%) | 70(68%) | |
| 2年生 | 99(93%) | 100(93%) | |
| 3年生 | 67(68%) | 62(63%) | |
| 4年生 | 77(91%) | 78(92%) | |
| 全体 | 317(81%) | 310(79%) | |

2 発達的变化

1) ブランコ課題

①HV 平均得点による発達的变化の検討

HV 課題の回答の得点を「悲しい」を1点、「うれしい」を2点とし、地域ごとに図 I-1-



1, 2に示した。得点が高いほど「うれしい」ことを示し、得点が低いほど「悲しい」ことを示す。一要因の分散分析を行ったところ、沖縄・東京ともに、加害者が「悲しい」という回答に学年差はなかった。自分が加害者の場合には、学年の主効果が得られ(沖縄 $F(3/190)=6.99, p<0.01$; 東京 $F(3/316)=8.22, p<0.01$)、両地域で1年と3, 4年の間(各々 $p<0.05$)、東京ではそれに加え、2年と4年の間にも有意差 ($p<0.05$) があり、1, 2年生よりも3, 4年生のほうが悲しいと答えていた。

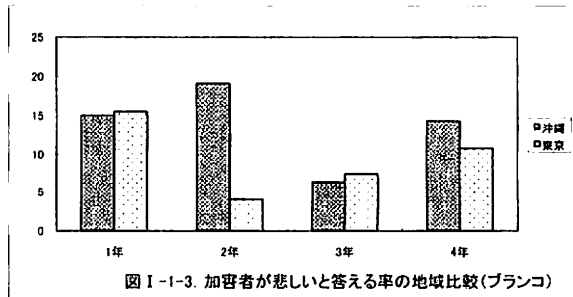
②HV 平均得点による加害者と自分が加害者ならの比較

「加害者」と「自分が加害者なら」の場合の比較をする際に、両者は被験者内要因であるために、被験者内の分散分析を行った。結果は前項の図 I-1-2に示されるように、1年生では条件差はなかったが、2年以降の全ての学年で有意に「自分なら」悲しいと答えていた(各々 $p<0.05$)。沖縄と東京の両地域でこの傾向は類似していた。柿沼ら(2009)の先行研究とも一致している。1年生では自他が未分化であるために、「加害者」と「自分が加害者なら」の区別がつきにくいのであろう。2年生になると子どもは加害者の気持ちを自分に置き

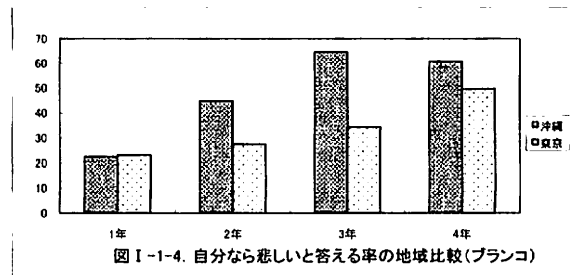
換えて判断する傾向が見られた。

③学年ごとの地域比較 (%)

両地域の加害者が「悲しい」と答える傾向を図 I-1-3 に示した。両地域ともどの学年で



も 20%以下であった。 χ^2 検定によって地域比較したところ、2年生 ($\chi^2(1) = 10.98$, $p < 0.01$) で沖縄が東京よりも「悲しい」と答える割合が高かった。

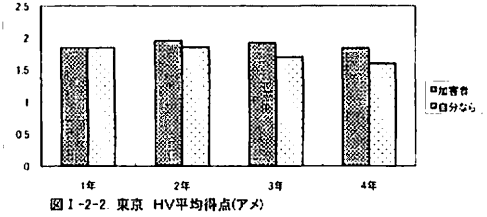
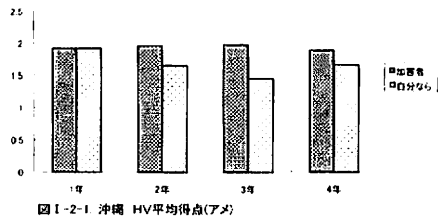


自分が加害者なら「悲しい」と答える傾向を図 I-1-4 に示した。沖縄では1年=22.5%、2年=44.7%、3年=64.6%、4年=60.7%であった。東京では1年=14.9%、2年=25.9%、3年=34.3%、4年=49.4%であった。 χ^2 検定によって地域比較したところ、2年生 ($\chi^2(1) = 5.57$, $p < 0.05$) と、3年生 ($\chi^2(1) = 10.98$, $p < 0.01$) で沖縄が東京よりも「悲しい」と答える割合が高かった。1年生では前項で述べたように自他が未分化であるために両地域ともに「自分が加害者なら」の場合でも共感的な「悲しい」と答える回答は低い。2年生以降に悲しいと回答する傾向は高くなる。2、3年生では沖縄のほうが東京よりも有意に共感的であった。沖縄のほうが東京よりも、自分が加害者なら「悲しい」と答える時期は早い傾向があった。しかし、沖縄の4年生でも6割なので、米国の先行研究に比較すると、日本の子どもは加害者が悲しいと答える時期は遅いといえるだろう。

2) アメ課題

①HV 平均得点による発達的変化の検討

HV 課題の回答の得点を「悲しい」を1点、「うれしい」を2点とし、地域ごとに図 I-2-



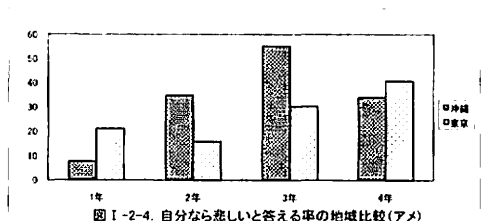
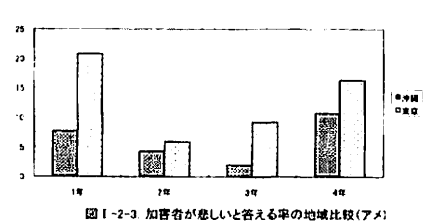
1.2に示した。得点が高いほど「うれしい」ことを示し、得点が低いほど「悲しい」ことを示す。一要因の分散分析を行ったところ、沖縄・東京ともに、加害者が「悲しい」という回答に学年差はなかった。自分が加害者の場合には、学年の主効果(沖縄 $F(3/189) = 7.99, p < 0.01$; 東京 $F(3/308) = 7.23, p < 0.01$) が得られた。下位検定の結果、沖縄で1年とその他の学年の間(各々 $p < .05$)、東京で4年と1、2年の間に有意差があり(各々 $p < .05$)、1、2年生よりも3、4年生のほうが「悲しい」と答えていた。

②HV 平均得点による加害者と自分が加害者ならの比較

「加害者」と「自分が加害者なら」の場合の比較をする際に、両者は被験者ない要因であるために、被験者内の分散分析を行った。結果は前項の図 I-2-1、2に示されるように、ブランコ課題と類似している。1年生では条件差はなかったが、2年以降の全ての学年で有意に「自分なら」悲しいと答えていた。両地域でこの傾向は類似していた。この結果は前述のブランコ課題と一致している。1年生では自他が未分化であるが、2年生以降では加害者の気持ちを自分に置き換えて判断する傾向が見られた。

③学年ごとの地域比較 (%)

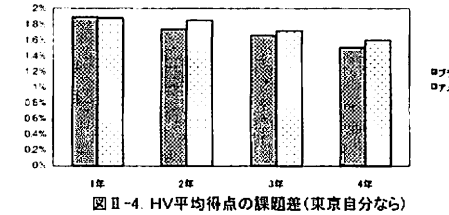
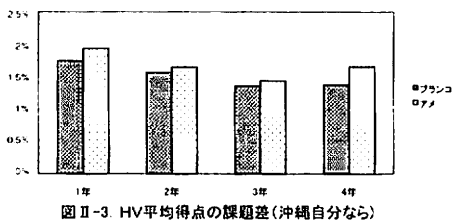
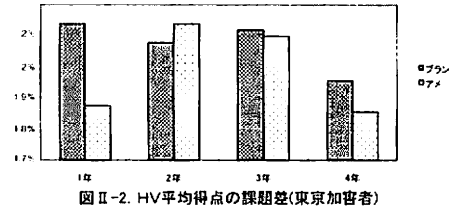
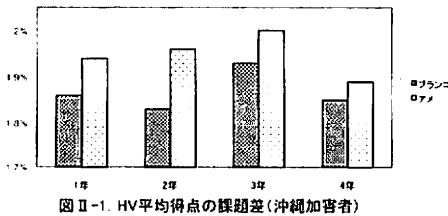
両地域の加害者が「悲しい」と答える傾向を図 I-2-3に示した。 χ^2 検定によって地域比較したところ、有意な偏りは見られなかった。



両地域の自分が加害者なら「悲しい」と答える傾向を図 I-2-4に示した。 χ^2 検定によって地域比較したところ、2年生($\chi^2(1) = 7.37, p < 0.01$)と、3年生($\chi^2(1) = 6.41, p < 0.05$)で沖縄が東京よりも「悲しい」と答える割合が高かった。この結果から、1年生と4年生では両地域に差はないが、2、3年生は沖縄のほうが共感的であった。

II 課題差

ブランコ課題とアメ課題の得点の比較をする際に、HV 課題の回答の得点を「かなしい」を1点、「うれしい」を2点とし合計した平均値を地域ごとに図 II-1,2,3,4 に示した。沖縄



では、予測と一致して「加害者」(図 II-1) および「自分が加害者なら」(図 II-3) のいずれにおいてもアメ課題のほうがブランコ課題よりも「うれしい」という傾向であった。東京では、「加害者」(図 II-2) では、課題差の方向は学年によって異なっていた。「自分が加害者」の場合(図 II-4) は、課題差は小さいが、一貫してアメ課題のほうがブランコ課題よりも「うれしい」という傾向であった。

課題差は被験者内要因であるので、比較のために被験者内の分散分析を行った。表3、4 に平均値と分散分析の結果を示した。有意な課題差が得られたのは、沖縄では、「加害者」の2年生 ($F(1/47) = 6.75, p < .05$)、「自分なら」の1年生 ($F(1/42) = 6.24, p < .05$) と4年生 ($F(1/58) = 17.31, p < .01$) でアメ課題の方がブランコ課題よりも有意に「うれしい」と答えていた。東京では「自分なら」の2年生 ($F(1/93) = 6.62, p < .05$) で同様の有意な課題差があった。しかし、「加害者」の1年生 ($F(1/58) = 4.74, p < .05$) で、ブランコ課題の

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 |
|------|-------------------|-------------------|-------------------|---------------------|
| 加害者 | | | | |
| ブランコ | 1.86(.35) | 1.83(.38) | 1.93(.25) | 1.85(.36) |
| アメ | 1.94(.23) | 1.96(.20) | 2(.00) | 1.89(.32) |
| df | 35 | 45 | 44 | 52 |
| F値 | 3.18 [†] | 6.75 [*] | 3.14 [†] | 0.66 |
| 自分なら | | | | |
| ブランコ | 1.75(.43) | 1.57(.50) | 1.36(.48) | 1.38(.48) |
| アメ | 1.94(.23) | 1.65(.48) | 1.44(.50) | 1.66(.47) |
| df | 35 | 45 | 44 | 52 |
| F値 | 6.24 [*] | 2.05 | 1.62 | 17.31 ^{**} |

()内はSD [†]p<.10 ^{*}p<.05 ^{**}p<.01

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 |
|------|-------------------|-------------------|-----------|-------------------|
| 加害者 | | | | |
| ブランコ | 1.97(.18) | 1.94(.18) | 1.96(.18) | 1.88(.32) |
| アメ | 1.84(.36) | 1.97(.22) | 1.95(.22) | 1.83(.38) |
| df | 58 | 93 | 56 | 69 |
| F値 | 4.74 [*] | 0.49 | 0.99 | 2.73 |
| 自分なら | | | | |
| ブランコ | 1.89(.32) | 1.74(.44) | 1.66(.47) | 1.51(.50) |
| アメ | 1.88(.30) | 1.85(.36) | 1.72(.45) | 1.6(.49) |
| df | 58 | 93 | 56 | 69 |
| F値 | 0.10 | 6.62 [*] | 1.29 | 3.09 [†] |

()内はSD [†]p<.10 ^{*}p<.05 ^{**}p<.01

ほうが有意に「うれしい」という逆の結果であった。その他の学年に有意差はなかった。東京で課題差が学年によって異なっていた理由として、有効回答数の結果で既述したように、東京の1年生は課題の理解に困難を示す児童が多く除外率が高かったので、例外的な結果かもしれない。課題差は沖縄では予測と一致していたが、東京では学年によって異なっており明瞭ではなかった。

課題差をもたらす要因については以下のことが考えられる。ブランコ課題は、身体的暴力を伴うので被害者へ共感的になりやすいのだろう。アメ課題は暴力を伴わないので、ブランコ課題に比較すると被害者への共感性が薄れ、欲しいものを手に入れて嬉しいという気持ちになりやすいのだろうか。その他の解釈として、アメ課題は、他人にみられずに、こっそり利益を得るという課題であった。この要因もアメ課題の方が「うれしい」と答える傾向に影響しているのではないだろうか。

まとめ

本研究では、Happy Victimizer 課題を用いて小学生の1年生から4年生の他者理解の発達的变化を検討すること、地域差、課題差を検討することを目的とした。本研究の結果から、以下のことが明らかになった。

- ① 柿沼らの東京での結果と同様に、米国の先行研究よりも、日本の子どもは加害者が悲しいと答える時期は遅かった。自分が加害者なら悲しいと答えたのは、4年生で半分以上であった。
- ② 加害者の立場に立って判断する場合（視点取り）と、自分が加害者ならの比較の結果、2年生以降では後者の方が悲しいと答えていた。つまり、加害者の気持ちを自分の立場に置き換えて判断する傾向が見られた。発達的变化は先行研究と一致して、自分が加害者の場合は1年生よりも3、4年生が共感的であった。
- ③ 地域差については2、3学年で沖縄が東京よりも共感的という結果であった。4年生では、地域差はなくなっていった。
- ④ 課題差については沖縄ではブランコ課題で悲しいと答える傾向が大であった。東京では課題差は明瞭ではなかった。

【引用文献】

- Arsenio, W.F., & Kramer, R. 1992. Victimiziers and Their Victims: Children's Conception of the Mixed Emotional Consequences of Moral Transgressions. *Child Development*, 63, 915-927.
- Davidson, P., Turiel, E., & Black, A. 1983. The effect of stimulus familiarity on the use criteria and justi-

fications in children's social reasoning. *British Journal of Developmental Psychology*, 1, 49-65.

柿沼美紀 2001 母親の語りにもられる地域差の検討 母子研究 21、56-61

柿沼美紀・上村佳世子 2008 「友達と仲良くする」ために必要な能力の検討—Happy Victimizerにもられる社会的認知能力の発達— 日本教育心理学会 50 回大会 p 207

柿沼美紀・上村佳世子・東洋・小林福太郎・佐藤仁美・David Crystal 2008 Happy Victimizer 課題でみる子どもの他者理解の発達 日本発達心理学会 20 回大会 p 444

謝辞

本調査の実施にあたり、高嶺小学校校長の新垣千鶴子氏の多大なご協力を得ました。また、本論文の執筆にあたり、砂川遥氏と PC SHACK の大城勝哉氏の協力を得ました。記して感謝いたします。

附録 HV 課題図版

